やく年と言うのは，マァーレドシ（生まれた年）である正月の年日か，日柄のよい日にセェーなどをトゥトゥ（いただく）する。サンゴンもする。年の祝だ。人を招待してする年の祝は，61才からである。祝は，1978（昭53）年1人，1979（昭54）年2人，和瀬で行なった。　MIの場合，73才の祝に約70人を招待して行なった。庭には，サジキを設け，テントを張ってしたけれども，狭い程だった。招かれた人は，あいさつをして祝儀をあげる。（平均2千円）。モリシオなど，祝の盃をいただく。さがって適当な場所にすわる。膳にサンゴンと言われる儀式用の料理と続いて祝用の料理が組まれて，配られる。あとは祝だ。祝う年は，7；13，25，37，49，61，73 85，88，99才までである。99才をした人はいない。88才は，旧8月8日に行なわれる。

（2）婚礼

イ）相手の決定

ほとんどは，親同志で決めた。布織り場所などには，青年達が来たけれどもそれらは，ほとんど実を結んでいない。自分達同志で決めていても，ネンゴロくわ にしかならなかった。ユサグリ（ヨバイ）があった。ネセ（青年）達は，明日が遊び日という晩には，青年会場に泊り込みで徹夜した。昔の家の戸は，内側から棒を立てて，かぎをしても，どういうわけか開いた。音を立てないように戸走りには，水を流したり，小便ををかけたりもしたそうだ。娘のいる家では，男親が戸口近くに寝た。娘はヨサグリを心配して，ひざをくくって寝た事もある。通婚圏について，男を中心にして考えると，他シマから来ている女3人である。かって嫁いで出た人，城へ7人，見里へ4人。来た人，城から5人見里から1人，他から1人。がわかる分である。（10.3%（昭和54.7月 29戸）89.7%の内婚率だ。）

ロ）縁談の成立

フチコロゼ（ふところに入れたセェー，内密に行く意から）や，ソーメンを親が持っていく。まとまると，クチムスビ（口結び）と言って，ジサン（結納）が行なわれる。ジサンには，餅重四つ，シュキ（料理）重四つ，シジリフタと結納金（昭和17年ごろ，50円～100円，昭和50年ごろ50万円位）。シジリフタには，縁起をかつぐ意味から，タコ，クブ（コンブ）などを中心にコーシャ，大根，人参，揚ドーフ，魚等々で ユウは（魚）手元と言われる。これが事実上の結婚式になる。この後は，男が女宅へ通ってよい。第1子が生まれるころまで通ったという。

ハ）結婚式

結婚式などは，現在もそうだけれども，家により，当事者の考え方により多様である風呂敷包みを1つ持って来た話もある。「やれ、んまはり　てぶーちいらんにし、やあーたっっち」（破れわん一つ，必要ないようにして，嫁入りして）。「ジョウシキベェ　モラタンチュカ」（炊事する人をもらったそうだ）などに，うかがえるように，それほど，格式ばった事はなかったように思える。それでは一般的には次のようであった。男側はトゥジムレ（刀自もらい）女側はヤアータチ（家出発）が結婚式である。女側では，ムケチュ（迎え人）の来るのを待っている。トゥンギャナ（花嫁の世話をする人）二人にフーリチュ（送る人）夫婦一組に男が一人をはじめ，親族が人々が集まって，ヤアータチユゥエ（祝）をしている。潮時を見て，ムケチュが来る。あいさつ，サンゴン，ムケチュがトリカワシ（献杯）しながら，シジリフタ（長方形の盆に似た入れ物の料理をあげる。御飯と汁，つけものが出て終る。手踊りまでして出発。

ムゥケチュを先頭に，表戸から出る。この時の履き物は，夫になる人が買ってきて届けておく。家を出ると，ムゥケチュは，「取った　取った　嫁　カナ取った」と，道中で踊る。城では，男の家へ入る前に近くの家へ寄って，装いを整えて入るが和瀬ではなかった。男の家では，表側から入り，床前につく。サンゴンが終わると，ネーショにさがり，祝が終わるまですわっている。夫になる人も表にすわって祝っている。その晩は，トゥンギャナも泊まった。城では帰りよった。

ドゥウグカタメェ ヴュ（道具をかつぐ人）は，男側から，嫁の道具に応じて，数人行く。5人位だ。この人々は，家の中に入らないと言われる。庭にムシロを敷き，席をもうける。セェーも出される。道中は「取った　取った　嫁カナ取った」と，はやすわけだ。どの場面でか，わからないけれども，水かけがあった。舟を引いてきて，そこへ水を入れておき，嫁は，四角のぜんをかぶっている所へかけた。（明4/年生）TAは見たという。水掛け風習があったわけだ。ユゥエは，その家の人が頼んだチィスによってすすめられる。

ニ）婚礼以後

ミキャムドゥリ（3日帰り）が里帰りで，新婚の夫婦に夫方の人が付きそう。料理や餅の重を持っていく。里では，サンゴンなどで祝う。

ハガレ（離れる）・離婚の事である。ヤアータチムドリ（家を出て帰った）出もどり。男側からの言葉はない。未亡人のニドゥヤアータチ（二度家を出る。再婚）が多かった。自給自足経済で労働が，きつかったからだ。男側も同じである。キンガダチ（男ぐらし）の人々は，戦争中，早く死んだ。毎日のごとく，

ソテツの製造のような，こまかい仕事をしたりはできなかったからだ。

ホ）婚礼雑記

（あ）イトコ婚の例，母同志イトコの子　2例。父同志イトコの子1例。

（い）ユミ：　ムラュントキヤ　シュト：　ミチムラエ（嫁をもらう時は，しゅうと見て　もらえ）

（う）冬なすび　冬なびら（へちま）や，ゆみ：（嫁）に食べすな

（え）七つ違いや，七倉建てりゅん（建てる）

（3）葬制

イ）葬式

死ぬことを，め：うと，り　しゃん（目が落ちてしまった）養生　かのいよらんた（養生ができなかった）。楽なり　しょちゃん（楽になった）。もうりしゃん（なくなった）。と　しじゃん（死ぬ）という言葉は，人の場合ほとんど使わない。葬式は，ソーシキと言う。死者の家へ，とむらいにすわることをクヤミという。

死の予兆，シカタが聞こえる。クフー（フクロウ）が鳴く。チュンタマシ（人魂）が飛ぶ。1978年2月，小学校4年生の子が「山鳥が，チャー鳴き（しきりに）していたら，ちょっとしてから人が死んだ。」と言う程，身近かに信じられている。死者は，すぐ北まくらにする。時計を止め，額などに紙を粘ったり，うらがえしにしたりする。身内の人をワザブ（使い人，配達の人）を立て知らせる。今は電話。他の村人は，門口にソー（サオ）を横たえる。バジ：（クワズイモ）を3本，1列に並べる。近親の者は，7日間は，日に照らされない。テ：クバリ（手配り，計画）といって，親しい経験豊かな人が，適当な人を割りあてる。今日では，多くを葬儀屋がしてくれる。名瀬から買ってくる。かっては，葬式用具のノリブネワキ（乗り舟ワキ。カン用の板づくり）などは，もちろん，へご板切り，サンゴの石取りかどっちか木拾い。テューマチ（タイマツ）取り，ロクドウの竹取り，女の方でも米つき　等，シマ中の人々が何かを分担してやった。ユーハシは，家族，近親でする。ゆかんは，畳をはずして，身内のものがする。水を先に入れ，後から湯を入れる。着物は，1枚の布で脇を縫い合わせ糸にもガブ（結び目）も入れない。2人で向き合って縫う。今日は，葬儀屋からくる。カンの中には，納カンの後，銭とにぎりめし，マンジョウギの葉（茶として）を入れる。ハチ　ウ：ーシリ（初上げ）が香典だ。金のない人は，ものを上げた。昭和51年で千円。一般の人々が葬列を送るのをカドホリ（門送り）という。

1978（昭53）年10月16日（月）に行なわれた葬式について述べる

死者BT10月15日名瀬で死亡。10月16日名瀬へシマからも近い人は葬式へ行った。17時ごろ遺骨の来るのを待っていた。式は，道路上で行なわれた。遺影，遺骨，花香，線香立てが車のバンパーの上に置かれて，焼香，親族から会葬お礼のあいさつ，シマからTTがあいさつ。墓地へ出発。前もってKSに，テューマツ（タイマツ）とロクドウ（六道）の準備が託されていた。テューマツに火がともされ1、2、3番火として出発，1番火から，ロクドウに点火。白旗2本，卒塔婆，マエジク（前机），遺骨，写真，花立て，花輪，近親の参加者，トウロウ，布団，ござなど　たばねたもの。シマの人々は，帰宅浜につくと，マエジクと遺骨を囲み，テュ　ーマツ皆んなと旗2本が左回り3回した。海辺では，死者が使っていた布団などのツト（包み）に石油がかけられ焼かれた。シマの場合，畳なども燃やす。墓地では，納骨堂があけられ遺骨を納め，各々の道具が置かれ，線香をあげる。海に行き沖へ向って3回，水をはねる。（シュバネ）して，セ：ーを手の平にいただき，なめてから，頭から，ふりかけ清める。卒塔婆は，日蓮宗だからある。白旗2本もだ。シマでは3本（白2，赤1でも，赤2，白1でも可）。

葬式雑記

（あ）死んだ人の上に涙は落さない。訳不明。

（い）白いもの（飯）を食べなければ，マブリ（霊）に追いかけられると言って子供も行って食べる。見里でも，ユッサグレマブリ（子ども，食べたがっている霊）が白い御飯を食べに行くので，それをこわがり，葬式の日は早く夕食をした。

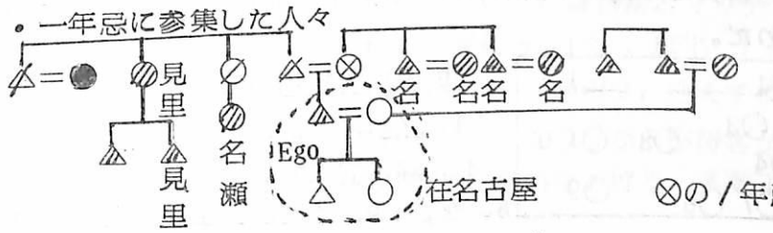
（う）普断，着物は2人で縫わない。

（え）生きている人は，水を先に湯を後から入れたのは使わない。

（お）浜でタイマツがまわる事は，主に住用村内だけで他ではカンがまわる。シマミセという。和瀬では，言葉も不明。

（か）葬式には，TAは参列していなかった。訳をたずねた所，旅にいる娘のオヅキマチ　することになっており，すでに準備していたからだ。

・一年忌に参集した人々



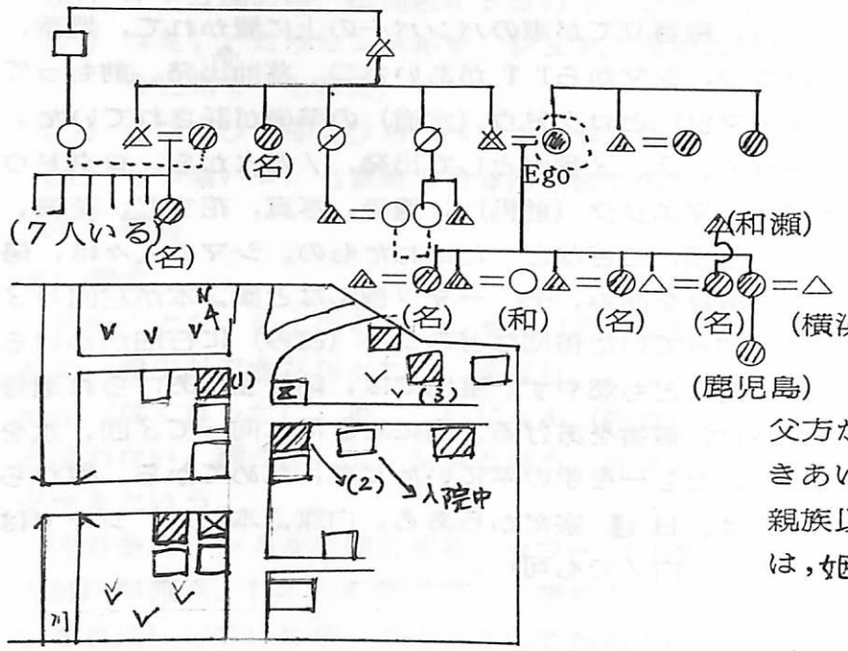
1977、7月

（名）＝名瀬在住

⊗の1年忌

B家で，3年忌と33年忌を1978（昭53）年7月24日に同時に行なった。ここでは，両系とも，参集している。

・7年忌に参集した人々の例



＝和瀬

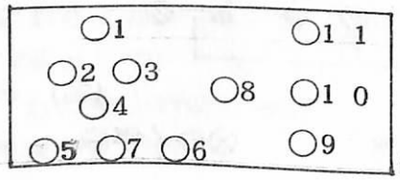
父方が多い。隣近所は，つきあいによる。

親族以外は，(1)(2)(3)は，姻族

ロ）死後の供養

埋葬は，近親の人々でする。家に帰ると，バケツに水を入れたのと，ひっくり返したゼン（サカゼン）の上にサラに塩を入れてある。塩をなめて，後へふりかける。水で手を洗って入る。ミキャナンカを，ひきよせてする。先祖棚へスイモンの初を上げ，「ミキャナンカ　スィーウェースュンケヾ」（三日七日の祭りをして上げます。）と言う。参加者へは，茶を出してから，吸物2つ，野菜の煮物，御飯等でヨツグン（4つ組ゼン）を供えて終り。後，墓参して，ミキャナンカを告げる。城では，葬式の際，墓地へ行けなかった人に墓参させる。シジュウクンチ（四十九日）の際，キョーデおじ，おばを呼んで，ミキャナンカと同じ。トラネの時は，ホウジをしない。　トラ年の人も参加しない。YTは，二千円の香典だけ他人に依頼した。後，7年忌，13年忌，33年忌で祭りは，終わりだ。

・1年忌



(B家) 先祖棚からおろす

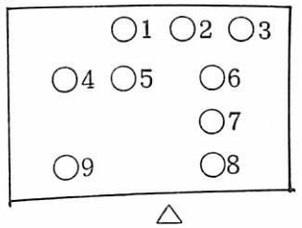
1…イハイ，2……線香，3……花香

4……線香立て，5……果物，6……香典，7……水

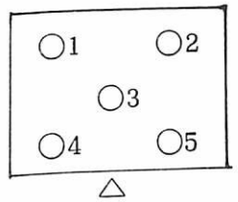
8……セェー，9……茶　10……菓子　11……写真

・13年忌の実際

親族の人々が集まった後，茶，菓子が出された。後墓参へ行く。線香，セェー，果物，米，水等々持参。1人ずつ焼香の後，茶ワンに入れて供えた水を，シバの葉で3回，はねてから拝む。帰りに海でシュバネ3回，沖の方へして，頭からかぶるようにする。家では，イハイを先祖棚から，前の机におろして飾る。

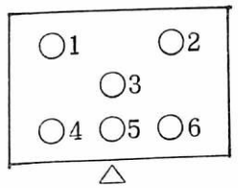


1．写真　2．イハイ　3．果物（リンゴ，バナナミカン）4．香典袋　5．線香立て　6．サカヅキにセェー7．茶，つけもの　8．五組ゼン　9．線香箱，花香は先祖棚においたまま。



五組ゼン

1．みそ汁　2．飯　3．甘納豆　4．貝とキュウリの酢の物　5．煮付け

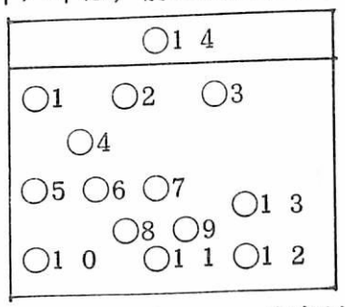


参加者へは，ゼン組が違う。

1．甘納豆　2．天ぷら，ハム，肉一切，魚切身，等々の盛り合わせ　3．貝とキュウリの酢の物　4．吸物　5．杯　6．飯。

・33年忌のようす

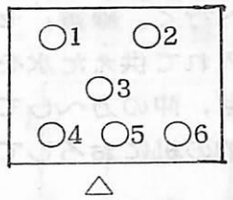
午後からの祭りの準備は，8：00過ぎから各々やっていた。先祖棚から，イハイは，前の机におろされ，飾られる。



1．果物（リンゴ，ミカン，バナナ）2．イハイ（1枚，33年忌の人）3．花（アフリカホウセンカ，ユリ，クロトン）4．ロウソク　5．香料　6．セェー　7．線香（1回に3本ずつ）8．茶　9．水　10．線香箱とマッチ　11．菓子　12．灰ザラ　13．菓子　14．写真

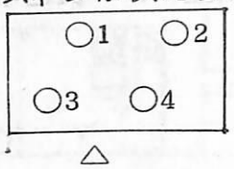
来客が見えるまでも，線香は，絶えず供えられる。線香の力で天へ昇って行くと考えられる。13：00から招待客が見え始めた。あいさつ後，机の前へ行き，香料を供え，線香をあげる。茶菓子が，配られる。市

販のムスコ2個，リュピ餅1切。そろったら，ゼン組が配られる。



1・煮付け（豚肉1切，揚ドーフ，コンブ，天ぷら，魚切身コンニャク，人参）2・さしみ 3・甘納豆 4・吸物（鶏肉，シイタケ，ネギ）5・杯 6・吸物（餅2切，コンブ，魚の切身1切，カマボコ1，タマゴ半分，ネギのこま切）。

兄弟の1人かチスになり，セェーをあげ「さあー どうぞ」と言った。共通語が使われた。「めぇー うぇーしゃうろ」（前をあげましょう，どうぞ），みんなが終った所で，セェーが配られた。「どうぞ」の合図で，4の吸物。「さしみがでぃ うぇーしゃうろ」（さしみまで，あげましょう）ここまでは，話もほとんどなく，正座だ。これがサンゴンの儀式。本来，1回ずつ，品物を配った。今は，1回で出す。これが終わって「ゆっくり しんしょれ（して下さい）」後は，自由に飲み，談笑したりだ。墓参の時間が近づいたころ，先祖へ，グズィンが供えられた。

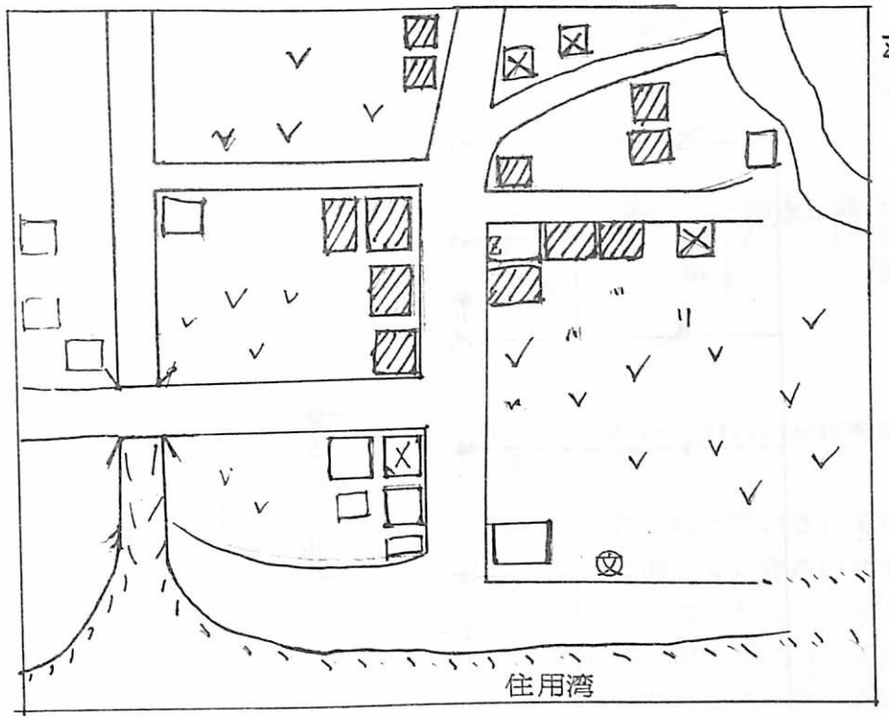


1・飯 2・みそ汁（トーフ入）3・ムジィ ヌコゥ（クワリの茎を下げ切りしたものに米を混ぜている）
4・つけもの グズィンは御膳か.

参加者には，飯と汁が配られる。おわり，墓地へ。墓地へ行かない人は，再度礼拝。線香をあげ，手を2回たたき，「33年忌の供養し うぇーしるんから（上げますから）供しられんしょうれ（供されて下さい）」と言いながら礼拝する。墓地につくと各々が準備をする。主人の末弟は，シイの枝（シバ）を切り，けずった。これにマジックで，33年忌○○○と書き石塔のうしろに立てる。これから，霊が天に昇って行くと考えられている。石塔には，ロウソク線香，湯飲みに水を入れ，シバ（主に椎の木の葉）で3回，水をはねてから拝む。全員が終わると帰る。海に行き，シュバネを3回する。供してきたマブリがついてこないように身を清めるという。終わると，手の平にセェーをいただき，なめてから，ふりかける。家では，小ザラに塩が入れられ，ゼンの上に乗せられている。これも，なめてから，頭からふりかぶるようにして身を清める。後は茶を飲んだりの雑談，自然解散。33年忌で供養はおわる。これは，祝といわれる。

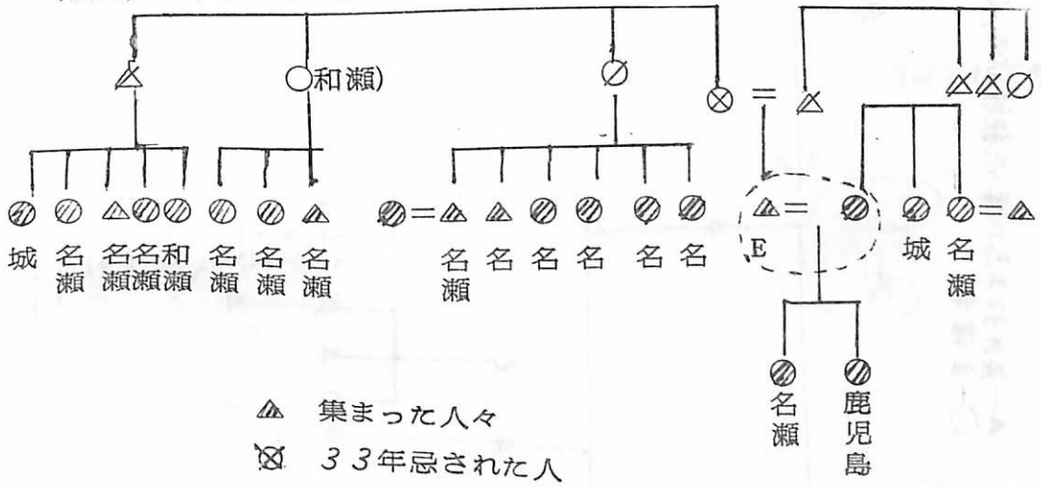
33年忌に集まった親族関係図．（例1）

集まった親族集団は，ほとんど男系である。



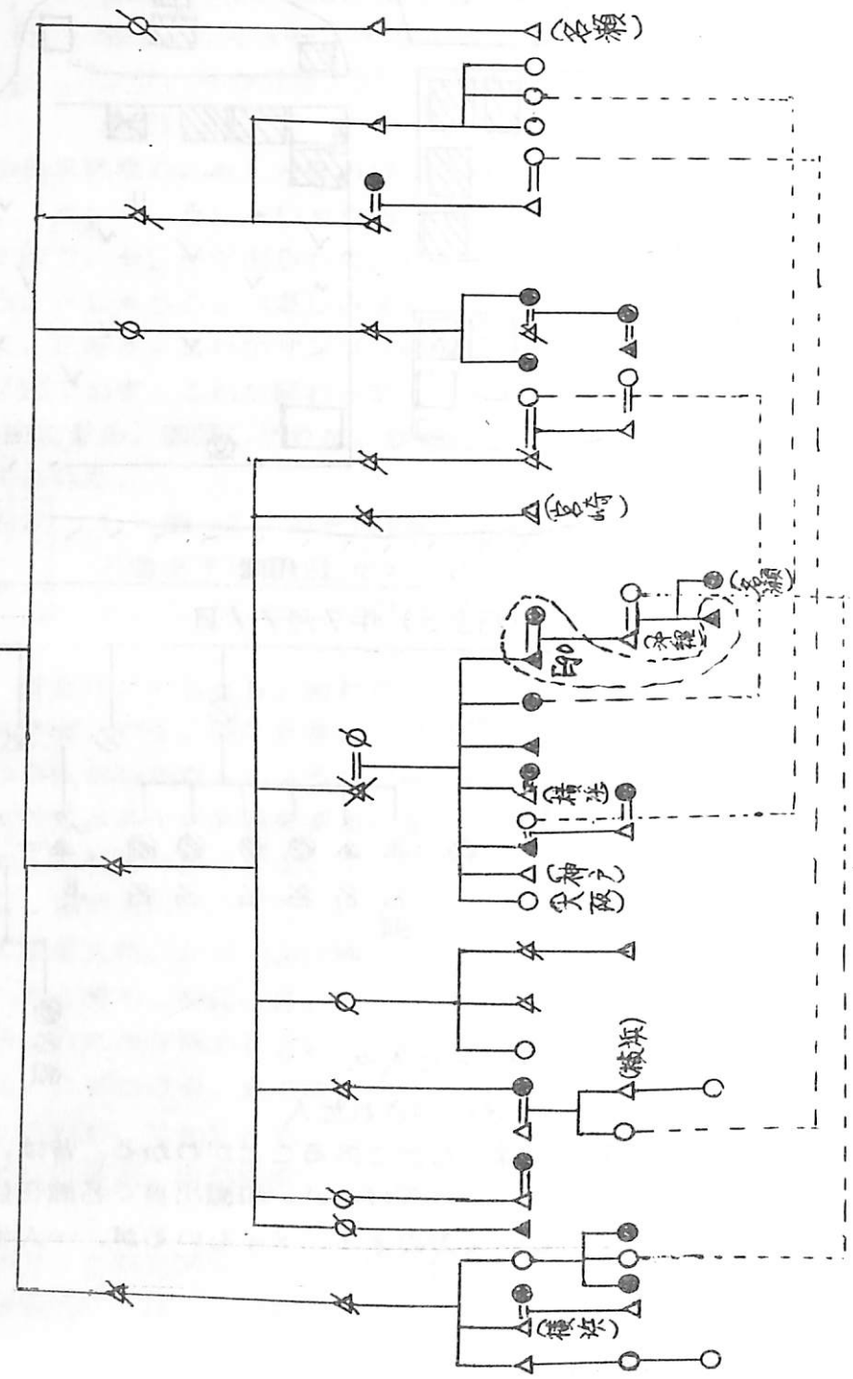
例1
この家に招待された家

（例2） 1978（昭53）年7月11日

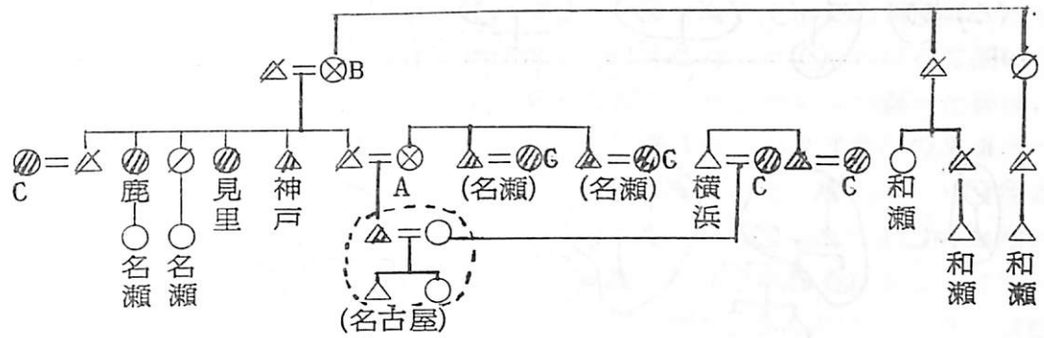


EGOの母のヒキが，ほとんどであることがわかる。昔は，Egoの兄第などにも知らせたが，今は，余り広げない。和瀬出身で名瀬在住。イトコキョーデだけ呼んだことになる。父方のオイ，メイもいるが，一人生んで離婚したのであえて呼ばなかった。

例1図　▲…☆の33年忌に集った親族の人々。（52ページ）
○…主催者



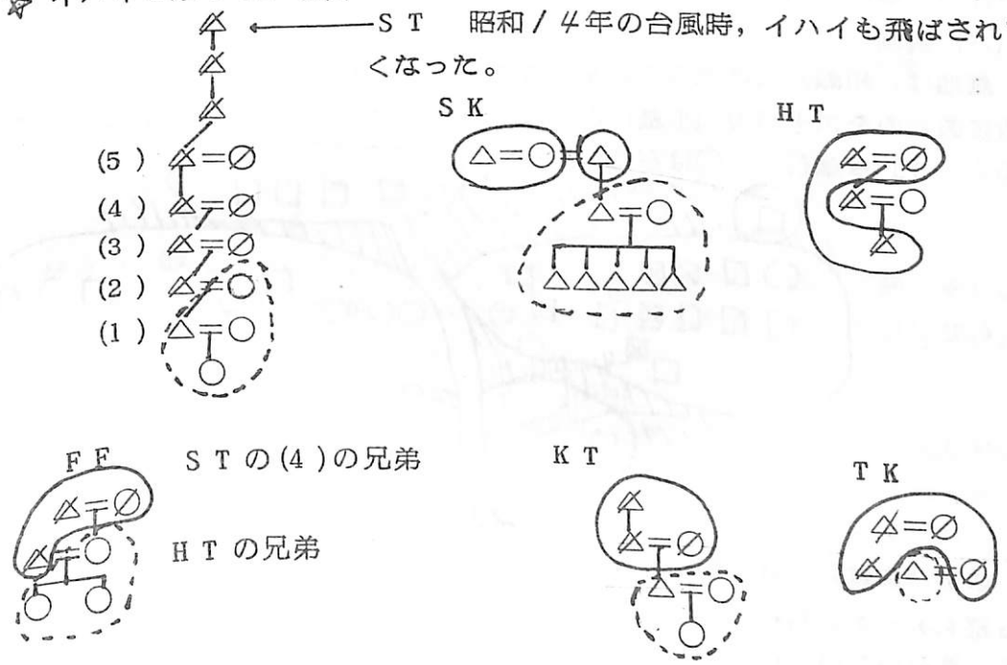
（例3）Aの3年忌とBの33年忌の合同の場合



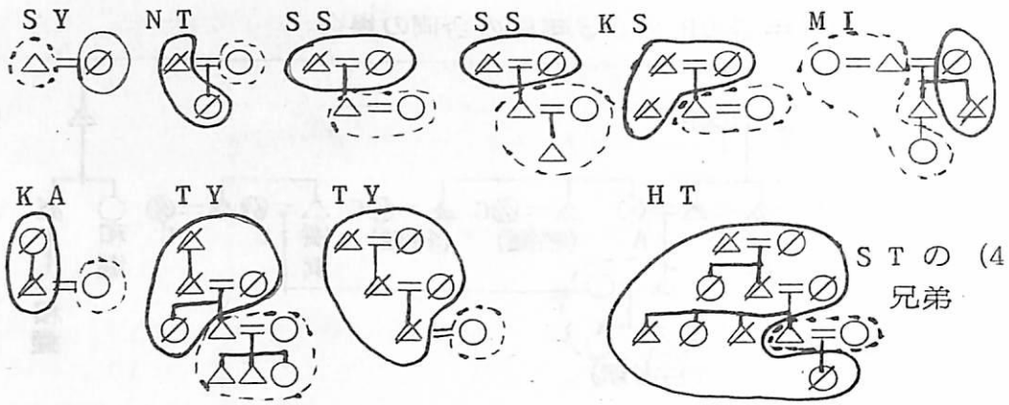
Bのおいの子など和瀬在住でも招待していない。おじ，おばを呼んだ。内輪だけのホウジだという。　Cは料理した人々.

☆ 死後，家から出ていくときに，すでに生まれかわっていき，その跡が家に残ると言われる。葬列が家を出る前にジロの火を消して，きれいにする。家を出た後にジロを見ると，足跡が残っている。トリになった人，犬になった人などだ。大正5年生のTTは，高等科1年生の時に，祖父が死去，その時にジロをみせてもらった。インぬはぎ（犬の足跡）といわれる形があったのがきのうのように思われる。それが一度だ。

☆ イハイを祭っている例



昭和1/4年の台風時，イハイも飛ばされて無くなった。

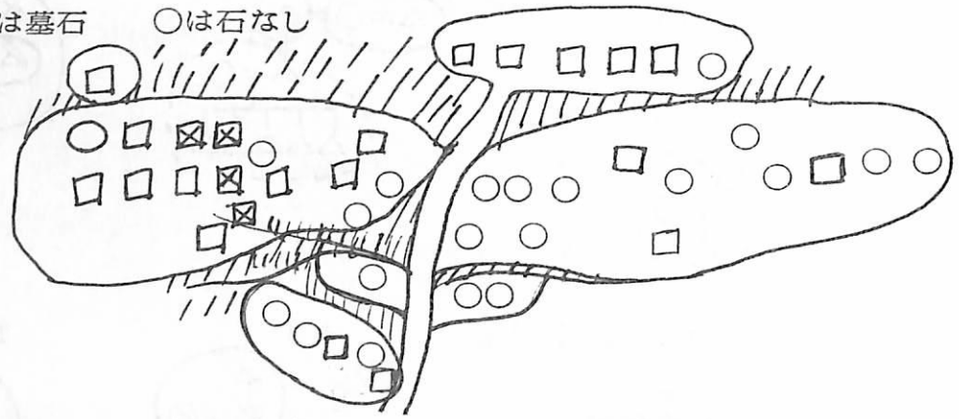


（　）は，現在住んでいる人。○は，祭っているイハイである。世代のさかのぼりが少ない。これは，本家にあたる家が，引越しした事によるかも知れない和瀬の家々の出自について，参考までに述べておきたい。（　）内は，かっての出身地，敬称略　田中（笠利）宅間（田中から分家）泉（古見方）迫田（田中の分れ）祈（小湊）山口（新村）和田（古見）与（見里）神田（古見）里（古見）厚（川内）伝（川内）福山（竜郷町芦徳）隠岐（埼玉県）。かって，和瀬に住んでいた人々で現在は，引越ししている。

俵（田中二男永）屋宮（宇検村名柄）大井（古見）杜（古見方）森永（笠利）吉井（見里）上田（神田の文字違いから）平（笠利）。

（ハ）墓制

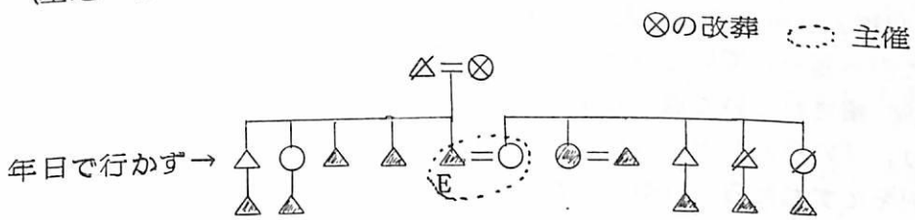
墓地は，和瀬の西と北西の2ヶ所にある。西にあるのをフーバカ（大墓）北西にあるのをエナバカ（小墓）と呼んでいる。フーバカは，階段状になっている。　□は墓石　○は石なし



エナバカは，今は，田中，和田を中心とした墓石だけである。ここにインキョ墓もあった。墓石の正面の向きは，多様である。東向21，北向16，南向4。墓石のない所が11。これが1次葬の所だ。○でカメだけの二次葬もある。

土葬だったけれども，火葬に変わってきた。埋葬のことをウンビという。死後は，まず，石塔（墓石）のない所へ埋められた。もともとその場所は，所有が決まっていたけれども，後は，自由な共同の場になった。そこは石で囲いがされ塚が立てられ，その上にヤギョが乗せて置かれた。ヤギョが腐った後は，花立てなどが残っているだけである。7年位以降改葬されて，墓石のある所へ納骨される。改葬は日を選ぶ。1980年がサル年なので，家内中にサル年の人がいなければしてよい。かつては，カノエサルの前日にしなければいけないといわれたが，後は，本土などに出ている親族の都合で行なわれるようになった。セェーを墓石にあげ，改葬するむねを告げ，掘る。少し掘ると，サンゴ石か，へごのおおいが出る。事例では，サンゴ石だった。一升ビンからセェーをふりかけ，入れものに，どんどん入れる。親しい人が，骨に太陽の光をあてないようにという配慮から，カサをかぶせる。曇天気でも同じ。骨を海へ持っていき洗骨する。頭骨だけは，真綿で包む。生前の顔形が浮かぶといわれる。残りは，一ヶ所に集め木に乗せ，燈油などをかけて焼く。そして，骨を何人かの人が，はしで手渡してから，ツボに入れる。かつては，洗骨した骨は，全部，トラハンドといわれるカメに入れられた。トラハンドは，墓石のうしろに埋められた。家に帰ると，ムチヌスイムン（餅の吸物）など出して祝う。洗骨は，お祝と考えられている。

（墓地へ行った例）



最近の土葬は，昭和51年死去した男女各1名。それ以前に夫婦。それ以後は，火葬。それ以前の火葬については，いつごろからか，はっきりしない。

ニ）霊魂観

マブリ（霊）には，イキマブリ（生きている霊）とシンマブリ（死んだ霊，死んだ人の霊）があるようである。まず，マブリに関しては，ユタが大きく関与していることは，衆知のことである。シマでもかつては，ほとんどの人々が何らかのかかわりをもっていたけれども，宗教（創価学会，天理教）を信じるようになって，ユタに対しての考え方も大きくかわってきた。

マブリワハシは，イキマブリとシンマブリと分けなければ，いけないとい

われる。これは，シンマブリが，イキマブリと共生している観念が見られる。
４９日以内の夜にする。
(事例1) ユタが，ユタうるしをして終わったらブルブルふるえだした。苦しんでいる様子だ。死んだ人が乗り移っていいだした。母が死んで７年目に父が死に，父のマブリワハシである。父は，喜んで踊っている。線香を持って，夫婦連れて歩かれる。こんなにうれしいことはない。財産の半分はおいて名瀬に出ないか，などを告げた。名瀬から伴したユタ。高ゼンに米／合／勺，金，いくらか不明。来て墓へ，ユタと２人，マブリをともしに墓地へ行った。旧の／０月に死んだ父。
(例2) ユタがいうこと「○が話してみようね，Ｉ兄，ひざを並べ並べ，すわっておれば，うらやましいね」ススキの葉をもってふりながらだ。
(例3) カサのたれた子は，泣くし，水気をすった木は燃えないし（以下不明）
(例4) Ｋの家で，マブリワハシをさせた。マブリワハシの前に，Ｓの家で，お茶を飲みながら，どんな人だったかなどを聞き，夜は，そこで聞いたことばかり話した。スロー(うそ）ばかりいっていた。

(あ)　　ユタと生活

旧の／月には，／年間の運気を見せに行った。何月には，何をするな。どういうことには，気をつけよなどといわれる。易判断といわれ，よく行った。
(例1) 昭和／９年ごろ，主人が戦争に行っており，連絡もなく，易させに行った。網に引っ張られているみたい。心配するな。生きて帰ってくるといわれた。ソ連に拘 留されていて返って来た。そのユタが，子が５人生まれると告げた／人おり，「いらん」といったら「生まれる」といってから「アーケー」と言った。訳をたずねたら「いや　いや」と何もいわなかったけれども，不思議だし，その後，本当に５人生まれ，末子が死んだ。「アーケー」は，それを意味したのではなかったかと思う。
(例2) Ｓが入院しているときに，ユタを共してみてもらった。豆を黒くいってシュバレをやり，家のある場所など「ここじゃが」と，いり豆を打ちつけていた所が，死後，帰ってきて寝かせた所と一致した。
(例3) Ｍが学校の裏でいねむりしていた。不思議だとユタへ，健康そうにしているが病気をするかもしれない。神高い生まれをしている。払いをしてくれた。
(例4) Ｆは，何かあると行くことにしている。母がなくなった時行った。そのユタは，始めてだけれども，すぐに，「近い人がなくなったね，親ね，兄弟ね」ユタが言った。母は急死で子供達の事を心配している払いをしなさいといわれ

た。家に来て，塩をまき，「死んだ人は，何も心配しないでよいから，成仏しなさい」といった。
(例5) 下の弟は，大阪にいた。弟は，身体の心配はいらないが，シマに急に帰ることになるだろうと言われ，親しい人が死に帰る結果になった。
(例6) ある人が，クサ（フィラリアによる象皮病）になっており，ユタに，どうすればよいか相談した。「ゾーセ（雑炊)に卵を入れて食べ，大汗をかいてねればよい」　そのとおりにした。もちろん治るはずだ。治療法はなく・・・布団をかぶって寝るだけだったからだ。

(い)　　マブリと生活

(例1) 母が病気にかかった。とたんに娘２人が発熱した。
(例2) 兄が子供連れて，本土から帰っていた。風邪も引かないのに，急に熱発した。先祖の霊（マブリ）によって，こういう事があるという。
(例3) 父が死ぬ３日位前に「小さい子が，迎えに来る」と言っていた。
(例4) 本土から兄が帰り，父が長くない事を知り，土産に持って来た酒を飲ませ，後，先祖棚に線香を上げ，「父は，もうだめだから，お母さん早く迎えに来て下さい」と祈った所，兄弟のみている前で息を引き取った。
(例5) 下の母のおばは，死んでから／週間位は，来るといっていた。「ほれほれ，そこに見えるよ，君等には見えないの」と，いっていた。
(例5) 死去した人には，キュラギン（きれいな着物）を持たせるものだ。グショ（後生）でもヤレギン（破れ着物）をつけて過すことになる。ある人が，名瀬で入院していて死去，そのまま，火葬した。夫に，「このような着物（入院のままの）をきて歩けない。」と夢を見せた。
(例6) 友達２人が約束をした。グショというのがあるそうだけれども，だれが早く死んでも，グショという所は，どういう所か教え合うようにしょう。先に死んだ人が残った人に夢を見せた。「グショのシマでは，　Ｋが，もうすぐここへ来ると言って掃じをしている。」これは夢だから，そういう事はないと思っていた。３日後に，　Ｋがポックリ死んでしまった。
(例7) 盆の時「セェーなど，あげているけれども，本当に来るものかね　」と，主婦が一人ごとを言っていたら，すぐハブラ（ガ）が飛ぶようにユラユラした。やっぱりいると思った。
(例8) 盆の日に城の人が草刈りに行ったら，ハブにかまれた。ゆっくり先祖祭しないからだ。盆の／６日は，かっては，奄美交通のバスなど休む程，どこにも行かずにのんびりすごした。

（ろ）　トリマデ

山鳥が鳴くと，人が死ぬのではないかと思い心配する。ムヌシラセ（物知らせ）。特にクフ-（フクロウ），カラスだ。シマだけではなく，外へ出ている人々にも不幸があるのではないかと心配する。鳥が家中に飛び込むのは，家に不吉な事がおこると言って家を外す。T が結婚前クフが入った。そこにいた人は皆出て浜に塩たき小屋があったので，そこに二晩泊まった。シマの人々は，食物など持参して見舞いにきた。二日分の家事の用具を持っていく。その後，ユタに易させた。家には何もなく，チュンブシ　カブッて（人の不幸を背負い込む）だ。結婚相手の家で親戚の木を切って家を建てていた。「金を払え」「払わない」ともめた。それではないかと話した。

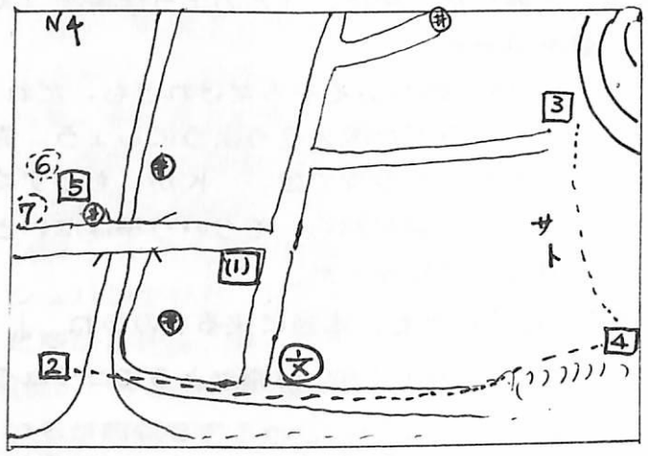
（え）　インマオ・生きマブリ・ザイムン

インマオという犬とネコのあいのこのような生き物が，タマシを取りに来る。先マブリといって，人が来る前に来る。イキマブリを見た。マブリを引きに来る。ザイムンというのが，またをくぐるとタマシを取られる等々とある。

第7章　信仰伝承

イ）シマで祈る神

信仰の対象になる森や山などは，すでにない。ただ，トネヤ跡だけが，かっての小屋があった所として木のはえたヤブになっている。聖地として語りつがれている場所は図のようになっている。



（1）十五夜の準備をした。
（2）カミヤシキ，住んでいた人がノロだった。
（3）十五夜の出発の家。（1）も。その年によってかわったようだ。
（4）トネヤ跡。　井 井戸
（5）グジヌシュ。
（6）カジヤ跡。
（7）アモロが浴びた。

十五夜の準備は，時代によって変わってきている。かって，ノロを中心にした祭りがあった跡が残っているだけだ。

ロ）祭り

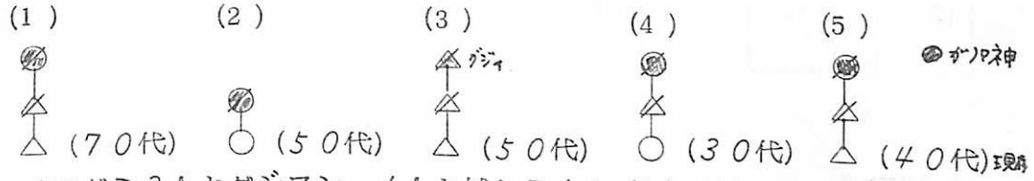
協同体としての，一ヶ所に集まってする祭りは，十五夜祭ハマオレだけだ。（年中行事参照）。

ハ）神供

ノロの祭りがある時には，各戸から，米を集め，ミキ（米を粉にして，イモなど入れたもの）を作った。祭りの後は，子供達にも少しずつ分けた。

ニ）祭祀組織

ノロの組織については，全然不明。わずかにわかった分を図示する。



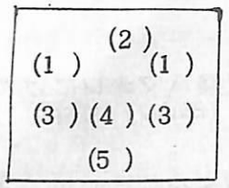
ノロガミ2人とグジヌシュ1人と城から1人（4）が祭りに来ていた。この人は，血縁では和瀬とのつながりはないということである。城のノロガミ様で（5）は東仲間のトネヤへ祭りに行っていたという。神役組織に何かあったのかも知れない。グジヌシュといわれた家は，現存している。

十五夜祭の時に土俵で，安全と村内の繁栄祈願を行なう。かってはフジイサングマが行なっていた。今は，泉牧貞が行なう。

ホ）屋敷神

石などを立てたりして屋敷神，地神とかは祭られていない。旧暦8月の最初のヒノエの日をアラセチというが，この日を屋敷神様祭りという。正月，五月九月15日か16日に潮のかかった砂を取ってきて，家の四すみの石の上に置く。

アミ：ミズ：ネの祭り，台所には，棚を作って水の神を祭っている人々もいる。女性は，水を使うので祭らなければいけないとユタなどに言われて，ほとんどが拝んでいたけれども，今日は限られた古老の方々，数人が，3ヶ月ごとのミズノトトリの日に祭っている。アミゴーに，シューギ（シトギ），セ：ー（呼称不明）二枚貝がらにシューギを供え，シューシ：キジ：ナ（海水のかかった砂）に，線香を3本立てて，健康など祈願する。「ドゥクサ　クヮーサ　アラチタボレ」が祈願詞の例．3種類位は，食べない物がある。そうしなければ拝んでも，ききめがないという。ジロ全体を火の神と考えたのか特定の棚などはない。9月9月には願直し願立てをする。願直しゼン組の例

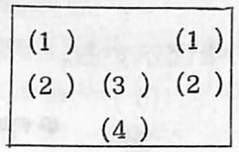


(1) オマルムン2サラ　(2) 野菜の煮付け
(3) ゴセビン（セ：ビン）　(4) 杯にセ：ー
(5) 香立て

(1)は，ダンゴ．

△

願立の場合



(1) ゴセビン　(2) シトギ
(3) 杯　(4) 香立て

△

ヘ）屋内神

山の神，先祖棚の隣や床の一部に花活け，セ：ーハチ（酒の初）茶のハチ(ﾊﾁ)香立てなどをのせた棚を作って祭っている。男の人はオン（オノ）などを使うので拝まなければいけないといわれる。セ：ク（大工）をする人，又は大工とかかわりのある人は，パンジョガネ（金尺）かス：ンチブ（すみツボ）を山の神の棚に加え，いっしょの形で拝む。祭りは，セ：クの神は，正月の2日に祭る。

ト）路ばたの神仏

道路が当たる屋敷などに立てる石敢当は，ないけれども，そういう屋敷は栄えないといわれる。インキョフッシュの墓石（正徳4年と有）に，かって，シマの子ども達は，村運動会などに行く時には，必勝祈願をした。

チ）講

月待ちは，あるけれども，講としてはない。月待ちの家へ，トギに行った事位である。

リ）寺と仏教民俗

日蓮宗　に入信した人々は，葬式や盆に塔婆を立てるようになった。仏壇と先祖棚の呼称が変わってきている。墓石も島津藩の治下から山川石，加治木石こがしら石などが使われるようになった。買えない人や，墓石の古いのは，サンゴ石だけが，単なる石だけである。

ヌ）民間宗教者

ユタ神様が，シマにはいないが，城や川内にいた。現在は，名瀬にいる。

頼むのは，正月に1年間の運気をみせたり，よく夢をみたり，身体の調子が，悪く，医者にみせても，どこも悪いところはないと診断されたりしたときだ。水の神祭りなども，ユタの判断が多い。他に，ムヌシリといわれる人々がいる。これは，カダホミジといわれる水に，マジナイの言葉を吹き込み，その水を飲ませて，治療を行なったり，あるいは，指でさしながらマジナイ言葉をいって直す。ケ゛ンムンに目をぬかれたといって，突然，目が針で刺すように痛く，涙が流れてたまらない時などだ。

ル）マーレガミ（生まれ神）拝み

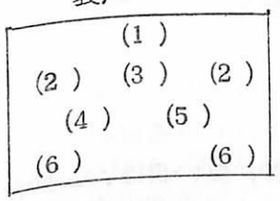
オヅキマチ（お月待ち）といわれる正月，五月，九月におこなわれる祭りである。13夜は，ウシ，トラ。15夜は，イヌ，この両日は昼拝みという。

23夜は，旅拝み。24夜は，ウ，タツ。28夜は，特にウチキマチという。ネ，ミ，ウマ，ヒツジ，サル，トリなどは，いつ拝むのか不明になっている。『奄美生活誌』は，15夜イ，17夜子。23夜午。24夜己。28夜未，申トリ（不足分だけ）

● 24夜の実際

準備したもの，サカキ，セ：，ウガミ餅（親餅と子餅），親餅は，1人分を2個とする。子餅の数は，はっきりしない。ウシンメ：（米を水にひたしたもの）。

表戸



△

(1) サカキの小枝3本ずつセ：ビンにさす。
(2) ゴセビン（セ：ーを入れたビン）
(3) 香立て（中に海水のかかった砂）
(4) 杯にセ：　(5) ウシンメ：ー（米を水にしたしたもの）
(6) サラに餅（下にサカキの小枝，上に子餅，親餅親餅にサカキの小枝3本立てる）。

香立てに一回で3本立て，拝む。燃えつきるまで他のことをしてすごす。談笑したり，テレビみたりだ。次に1本ずつ3回，最後3本1度に立てる。これでナナハナといった。これが終わると，サカキの葉でウシンメ：をいただき，ついでゴセをいただく。参会者にもあげる。

マチアゲ　神様のテ゛ムチ（土産）といわれる。餅のサラをさげ，供えなおす。子餅の団子3個，上に親餅3個（拝む子の数で違う），ウシンメ：をのせサカキの小枝1本立てる。

	(1)	
	(2)	
(4)	(3)	(4)

△

(1) サカキ3本，(2) グセビン1本，(3) セェー
(4) 餅ザラ，これは，線香を最後，3本立てるときと同時に行なう。

線香の立て方は，家によって違うようだ。チュサキ3本，タァ(2) サキ，ミィ(3) サキ，ユゥ(4) サキ，イチ(5) サキ，ムゥ(6) サキまで各1本ずつ，ナナ(7) サキに3本，ナナサキのときが，マチアゲ，マチアゲが終わると，外に出て，東方に向って（例）「ヨイトシヌ ○○ガ マチアゲシ ウェーショリタン カラ ウケトリ サントリ シンショシ カホグトゥブェーリ アラチタボレ」（意訳：良い年の○○が，マチアゲして，あげましたので受け取って下さって，よい事ばかりあるようにして下さい）。（例2）月ぬ やくぬ 回りば 月とて はずしんしょーち，日ぬやくぬ 回りば 日とて はずしぃんしょーち（はずして）どぅくさ くぉーさ あらしんしょーれ（若く，強く，あられるようにして下さい）。拝むわけについては，ユタにより「マーレガミを拝みなさい」と言われる。『奄美郷土文化』第10号参照。

ヲ）禁・呪・占

シンホジョ（死の忌）は，親しさによって違う。3～7日間，日光にあたらない。イショ（漁）や，荒れ山に行かない。人と共に喜んだりしない。（葬制参照）。チィキヤク，チィキヌムン（月経），チホジョ（御産やチィキヤク）。人前に出るのをはばかる程度で特にない。シンホジョのときには，ショウジンといって油とザコを使う位だった。忌まれている屋敷は，カジヤ跡，トネヤ跡，カミヤシキ（ノロがいた）今は，ヤブになっている。忌まれている日をワッサンヒューリ（悪い日）盆の16日，正月五月九月の16日，良い日は，ムヌシリに見てもらった。今は，暦で大安を選ぶ。

イショ ヤ メィーチィ キャ 山ヤ ウーバ（漁は，まばたき，山には大ぼら）漁には，行くとも言わず，目の合図で知らせる。が，狩には，大ぼらをしながら行く。豊漁だ。舟でヒンザァ（ヤギ）の話はしない。海岸の草地（ヒザ）には，ヤギを放し飼いしていて舟から，よく見る。訳不明。山でもヒンザのにおいがした時は，言葉は，出さない。ケィンムン（実体不明の怪）がいるからだ。

十五夜祭りの時，ホラ貝の音，太鼓をたたきながら「スモウ スモウ」と大声を出しながら，シマの道をねり歩く。悪払い。旧暦9月9日に1ヶ年中の願ノシ（直し）願立てをする。ジロでだ。旧4月のハマオレに，虫をコショデ（後手）で，海へ投げて流す。シキョマには，稲穂を伴してくる。スイジガイを

表戸や，家の中などにさげている。マヨケ。占いは，易といい，運気みせが多い。（葬制参照）

ワ）民間療法

（あ）熱発・寒気がした時には，フチ（ヨモギ）の芽をつみ，湯をかけて飲む フチや，かぜはーし なりゅん。（ヨモギは，風のけぇーしになる）生きブチともいわれた。のどの痛み・風邪気味で，たんが出たり，せきしたりして，のどがひりひりする時には，アチコホ（みかんの一種）の汁をたぎらし，砂糖を入れて飲む。かぜひきのときには，ニワトリ汁を飲んでねる。トリは，簡単に殺せたが，ヒンジャは簡単には食べられなかった。

（い）ヒミキ（ぜんそくで，ヒーヒーすること）する人は，ウム（サトイモ）は，かゆいからいけないといわれた。何もきかないといわれた。

（う）肺病，内地から病気になって来る場合が多かった。「まっさん かましゅむが てぃ」（美味しいのを食べすのが方法）といわれた。T 5年生で和瀬の人が8人死んだ事を知っている。死んだら家をこわして，他シマへ売ったりした。

（え）クサ（象皮病，フィラリア）には，クビクサ（首の所に団子がでる），ハギクサ（足がふくれる）などがあり，熱が出，ふるえ，翌日は，ふらふらした。フチの湯などを飲んで布団をかぶり，寝ているしかなかった。

（お）カザホメィジィ（マジナイ言葉の入った水）は，急に原因不明の熱発をしたときなど，ムヌシリ（物知り）から，もらって飲んだ。

（か）げり，塩を入れた卵焼き。ヤイトをして，暖める。虫下しは，マクリをせんじて飲ます。

（き）ハワセ，口の中に白いのが出て，ただれ，痛くて何も食べられないときあごと首の間にヤイトをした。ほっぺに焼く人もいた。

（く）カザメェへ，かゆくなる。オンゾ（毛）虫が刺したようになる。ワラ製のナベフタをかぶせ，ナベつかみにナベずみをつけたもので「カザメェ すぃんな むんめへ，すぃんな フーフーフー」と言いながら，上から下まで 3回たたくと直った。

（け）ガブ，フーバクサ（オオバコ）を火にあぶり，張りつける。うみが出るナリの実も，くだきつける。歯痛，耳の後方にヤイト。エー（焼）針は非常手段虫歯に入る位の針金を 赤くなるまで焼き，虫をかんでいた穴に瞬間的に刺し込み引きぬく。2秒位でだ。ジューという感が 脳に来る。

（こ）イビル（ものもらい）「イビル イビル やぁや ぬが ぬきゅる

わんや　わんうとぐゎぬ　イビルど　ぬきゅる」（イビル，おまえは何をぬくか私は，私の弟のイビルをぬくよ）と唱なえながら，末子が人差し指で3回，ぬくまねをする。

（さ）子供の熱病は，よくあった。冷やしたり，黒砂糖水を飲ましたりした。ひきつけたりした時には，ムヌシリからカザミズィをもらって飲ました。きくと信じていたので効果があったように思う。夜泣きには，へのへのもへじを，どこかに書けばよかった。本土からきたのかも。

（し）とげ取るだけ，傷に，フチをもんでつける。切り傷にソテツの実。やけど・みそつける。ハチにさされる。ハンクス（歯ぐそ）をつける。ハブにかまれる・傷口から吸い出す。かみそりで切っては，吸い吸いした。T は，奥歯が，早く抜けたのは，人のハブにかまれた所を，吸ったからではないかと思う。すいだまも使った。

（す）ニギのクチムト　（骨をのどにひっかけた時のまじない言葉）「おばなぬ　しぃかま（朝）浜ば　うりて　舟ば　浮きて　白いゆう（魚）ば，ちぃらげて，（釣り上げて）赤いゆうば　ちぃらげて，　うっっか（それが）ニギばぬで，（飲んで）ふかさりばいり　あささりばいじり」と唱なえて湯飲みの×字の上方から水を3回飲まし「ナミアミ　ダブツ」と3回唱なえる。

（せ）下痢気味で，毎晩，便所へ通うと「あちゃ　よーねら　くすまりが　きぃきりょうーらん」（明日の晩から，くそをしに来る元気がありません）と，言って，頭を下げた。

（そ）後産が下らない時は，カザホミズィを飲ました「うなぎのごとく　くだれ　くだれ」

やいとは，民間療法の中で大きな位置を占めていた。ツボのことをネーといい，ネーを知っている人をネーキシャと。シマでの現存のネーキシャは，田中トメ（ムチおば）である。ムチおばは自身が，産後大病をして，ネーヤキの人を供して，あらゆるネーヤキをした。おじの刀自田中シゲマツ（城出身）がネーキシャであり，シゲあんまの父，トイショふっしゅがネーヤキだったという以下，ムチおばから教えていただいた分である。

（あ）ヌウィボーソ・すぐ，焼くとよい。

（い）カタカマチ・男は左手，女は右手を使い，鼻の上に手首の線をあて，薬指を中心にしてはかる。三つの部分だ。

（う）古クギ踏み・背中のナナツメィというところ。たばこ骨から指を折りまげ七つ目にあたる。

（え）クイチゲ（食中毒）・へそから1寸上へ，左右1寸ずつ，三ヶ所。

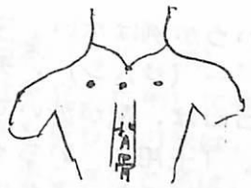
（お）ミィジワタ（水腹）・へその上1寸を中心に左右1寸ずつの3ヶ所。後のへそ上との対応部分，足の甲三ヶ所，足の薬指を折った裏。

（か）ァハーベ。主に赤子に出きるブツブツの皮膚病の一つ。頭の囲りを計り薬指を折った時とにぎる間接の分を切りすて，首に，ワラをはかせて背中側の所を起点として，1寸程下がり2ヶ所。

（き）シンシャク，モモザシ・足へ行く血の所，尻から足のつけ根の所にかけて，すじがある。

（く）

（け）



（こ）

（く）ヒキ（肩こり）・背中の，ホーランブネ（肩こう骨）を見て，3ヶ所を決めて焼く。

（け）わたやみ・へその上1寸，左右へ1寸ずつ

（こ）のぼせ・マチゲ（頭の頂上）。耳のつけね上，チブルヌイシクチ（頭をすわらしている始め）の3ヶ所。

（さ）タチグラミ（急に立ったときの目まい）

（し）キィーワタ（黄だん）・耳のつけねの上，マチゲ，メッッチョ，ミゾオチ中心に左右3ヶ所，タバコンブネ（背中の首のつけねより下にある骨）。

（さ）

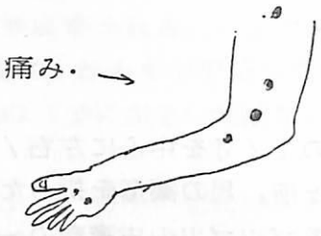
（す）急性のごりごり．とても寒がって，あっちこっちにガブ（ごりごり）が出きる。右側に出きるときは左。左側の時は右にやく。胸囲を計り，半分にまげる。肩の骨から脇のアバラの方へとり，決める。

（せ）とても寒がる時．棒を背中，脇にはさみ，背骨を中心に左右／寸間隔で7ヶ所。

（そ）胸の病気．ヒキチブと言われる。背中のけんにそって，たてに左右，各3ヶ所ずつ。胸の水月を中心に各／寸，上方にも／寸六ヶ所。

（た）産前産後の血の破れ．左手で右手を計る。親指を手の平にやり薬指を中心に先があたる所。

（ち）手のつかれ，痛み．→



（注）編者の理解の仕方が不十分な為にネー（つぼ）が明確になっていないかもしれない。その責は編者にある。

カ）ヨウ怪・幽霊．

化け物をバケムンというが例はない。マヨナムンとしては，ケンムン，ブッコロ，マブリ，ワンクー（ジムン），チューダマ（人霊），ヒジャマ（火の玉），インマオ。ブッコロは，童が泳いでいると，引き込み，ブッカ（尻）から腸をぬくといわれる。「土用ぬ　いちゃん（入った）」といって，海が時化てくるのは，ブッコロが人のみないうちに海の中にポトンと入ったからだ。他の項目は『和瀬の民話』参照。ケンムンについては，別にまとめる予定である。

第8章　年中行事

イ）節と休み日

オリスィク（折り節供）は，アシビ日という。行事は，正月以外は，ほとんど旧暦である。

ロ）大正月

ショウガチ（正月）．若水くみ．元旦の早朝，一番鶏の鳴き声を合図に近くのキガワへ行った。くみに行く時などは，他人と口をきいてはいけない。フを逃がす。アササンゴン．元旦の早朝に行なわれる家庭内の儀式。

サンゴンの料理（1）餅の吸物（2）さしみ2切（3）鶏肉の吸物。各々の間

にセェー．（焼酎）が入る。

・ネィントウマワリ（年頭回り）「新まて、めぃじらしゃん正月じゃが，正月きゃ　ゆるっと　あてな」（新まって，珍らしい正月ですが，正月は，ゆっくりですか）。

・フッカ（正月2日）．仕事初め，ソテツ植えや，杉の枝払い。吉書，7才になる子は，筆取り初め「はつふでそうし」と書いた。

・セェク（大工）の神．高ぜんにバジャガネ，スミサシ，シュモリ（塩盛），コンブを飾り，男が拝む。サンゴンをする。ウシタ（祭りの後のもの）をもらう

・ウヤネィントウ（親年頭）．嫁へ行っている子が親へ，あいさつに来る。

・トゥシワスレ（年忘れ）．子どもだけドンブリシュキ（料理）を持参，共に食べたり，歌ったりして遊んだ。

・イチカンスィク（5日節供）．床餅をおろし，餅の吸い物を作り，先祖棚へ供える。・ナンカンスィク（7日節供）．ナンカンゾーセ（7日雑炊）を作る。七品そろえる。7才になった子が七軒もらって歩く。やくをはずす。今はない日暮れ時に鉄砲のあった迫田氏が空砲を合図に鳴らすと各戸では，戸をドンドンたたき「オニは外，福は内」といった。この日，天からオニが降りてきて人間を食べたので追うというが，くわしくは不明。

・イビィス祭り

舟を持っている人は，小ザラに白米（ウルチ米），さしみ数切，杯を盆に，セェーを持っていく。ホドク（帆柱を立てた所）に供える。船霊は，ここにいると考えられた。航海の安全と豊漁を祈り，白米は，舟全体にまく。詞は，（船霊様の項／7ページ）。かって，手こぎのころは，3人一組だった。舟主とフナマといい，舟主の家で祭った後，祝った。舟主宅では，漁具を床前に飾りセェを供える。フナマは，ドンブリシュキを作って持参。

ジュウイチンチヌスィク（／／日の節供）

机など諸動具に供えた餅を下げ，餅の吸い物を作って先祖棚に供える。門松を取り払う。

ナリ餅（／4日）

・紅白の餅を小さく切ってブーブィル木に刺して，先祖棚，床，表間の天井，玄関などに飾る。今は，赤，緑，黄，白が／袋200円で市販されている。

ハ）小正月

クゥショウガツ（小正月．／5日）．大根，肉，餅，野菜などの煮付（餅の

吸い物）や豚骨を煮て，年の晩のような料理を作って食べる。

・山ン神祭り（16日）

シュギを小皿二つにのせ，カンビンにセー，盆に飾り拝む。サンゴンを男はする。香立ての砂を潮のかかっている場所から取ってきてかえる。

・20日・ヒキャゲを作る。14日の飾った餅とイモ，サトイモなど入れて煮てねる。先祖棚へ供える。

ニ）2月

ノロガミの祭りがあったことが推測される程度。

ホ）3月

サンガチスク（3月節供）・女の節供と言われる。フチムチ（ヨモギ餅）をひし形に切る。ミナ(貝）拾いに行く。「浜チ　イキャンバ　グジマナリュン」(浜に行かなければ，ヒザラ貝になる）。

ヘ）4月

・ハマオレ（浜下り）・村内統一して日が決められる。涼しくなるころ，シュキやセーを持って浜へ行き，語り，歌う。子ども達だけは，弁当を持参，別の所で食べる。

・ハツマネ，二度マネ（午の日）・麦飯とニラジルを食べる。やくをはずす。

遊び日。

・アジラハネ・ハブ除きの祭り。田畑の草をなぐ。長いものを扱わない。

・ネンネ（子の日）・仕事をしないで遊ぶ日だった。1年に3回あった。青年の会があった。

ト）5月

キンガヌスク（男の節供）・ガヤマキを作った。ショーブとフチを先祖棚に供える。玄関の軒下に刺す。料理の例・揚ドーフ，カボチャ，竹の子等の煮物。川の小エビを粉で天ぷら。

チ）6月

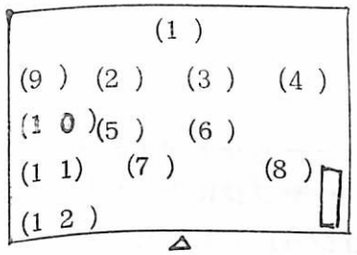
シキョマ・初穂儀礼。シキョマしなければ，稲刈りができない。潮が満ちるときに稲穂を7本トモ（連れ）して床柱にさげる。穂から数粒を入れた赤飯をたく。トッチブル（カボチャ）など野菜煮付。シキョマ道といって，道路の草刈りした。

リ）7月

・七夕・竹を切ってくる。市販のものを飾っている。大正10年ごろ，色紙，1銭で5枚。赤、黄、紫、緑など入っていた。この日，タナバタ雨が降る。天の川の真向いで会って，流す涙雨。タナバタまきといって，大根の種まきをする。虫がつかないといわれる。

・ブン（盆）13日～15日。ウヤフジマツリ，コウソマツリともいう。ムケ(迎え，13日）・都合のよい時間に墓へトモしに行く。線香をあげ「トモシウ　ーショロ」（伴してあげましょう）といって帰る。イフ（位はい）を先祖棚からおろして飾る。茶，セー，セーシュキ(ソーメン），ムスコ，水(中にシューロバシを入れる）などを供える。迎えに行くときに七夕の竹を切り，墓地の花立てに持って行く。1年1回，かえることになる。軒下にトウロウをとぼす。YY家の13日の飾り方の例。

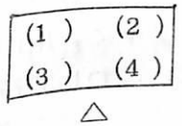
先祖棚



(1）イフ（2）線香立てに線香（3）ロウソク（4）コップに水（5）杯にセー（6）かんびんにセー（7）カシャムチ（8）果物の盛ザラ（リンゴ，なし，ブドウ，バナナ）（9）すいか（10）型菓子（11）小ザラに菓子（12）たばこ2本。□は他の人々からのハツ。

・マツリ（14日）・1日中，もてなしだ。アサチャ，アサバン。ヒルヌチャ，ヒンマバン。マドムン。ユウバンというようにだ。

アサバン（朝食）



(1）つけもの（2）野菜の煮付け（3）みそ汁。普段は人に（4）にみそ汁をおく。（4）御飯。はしは，ソウロウバシを使う。

ヒルヌチャ（昼の茶，マドムンともいう）・吸い物，ウトシリ（小豆の汁に餅を入れる）。

ヒンマバン（昼食）・マンジュウ餅　（マンジュウ木）の葉に紅白のムチを作る。

マドムン（間の物）・ドンブリシュキ。

ユウバン（夕食）・小豆御飯をたき，四組ゼンをあげる。

(あ) ST家の例

アサバン，小豆御飯，みそ汁，野菜煮と魚，つけもの。

マドムン，小豆と餅入り吸い物。
ヒンマバン，かっては，マンジュウ餅，今は，カシャ餅。
マドムン，ナビィラ（へちま）の吸い物。ウム（サトイモ）を煮て，トドロの吸い物，ナスビの吸い物。
ユウバン，小豆御飯，コナ（七夕マキした菜）の汁。天ぷら，魚，トーフなどのサラ物，つけもので四組ゼン。

(い) ＫＴ家の例

アサバン・小豆ガユ，野菜煮物，トウガ野菜入りみそ汁，つけもの。
マドムン・トーフの吸い物。
ヒンマバン・マンジュウ餅2個，•トモ，ウム（サトイモの葉）に料理を入れて供えた。トモは，他の重，城では，表の柱下ハ供える。

•トモシ（伴する／5日）

アサバン・小豆ガユを固くたき，はしを十字状に立てる。精進汁，つけもの，野菜煮物。
マドムン・タマゴの吸い物。
ヒンマバン・チィキムチ（つき餅），ぜんざい，吸い物。
ユウバン・ドンブリシュキ，ムジィヌコ，ムジといわれるサトイモ，クァリなどの茎をさか切りして米をひとつかみ入れ混ぜる。ウヤフジにとっては，最高の産（土）といわれる。夜は，八月踊りをする。後生（ゴショ）でも，オヤフジが踊っており，負けてはならないと踊った。

盆雑話

(あ) ／5日に水棚を作った。大正／0年代には，シマにも5家位でみられた。丸棒を4本立て，棚を作り，周りをソテツ葉でかこう。／979年に，川内では，／軒だけ作った。夕方，ウヤフジを墓へ伴して行くときに，こわして持って行き，浜に捨てた。「遠さん，くぁまがぬ　きゅんとろ」（遠い子孫の来る所）といわれた。

(い) ワンなども，八十ワンというのがあった。何組も，ゼン組して供えたけれども今は，多い家で3組だ。

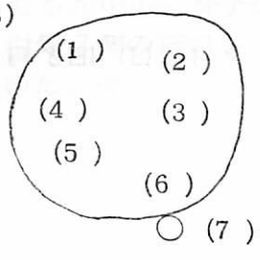
(う) アラゴサ，ミーボンの家には，シマ中の人々が，何か持って行く。型菓子，線香などだ。

又）8月

アラスィチ，旧8月の最初ヒノエの日。前日をシカリという。ミキ，茶，水セェー，キビ，ミカンなどで，ゼン組して，表戸に向って供える。ハシは，桑の木を使う。ウム（サトイモ）を煮て食べる。屋敷の神祭りともいう。

シカリのゼン組の例.

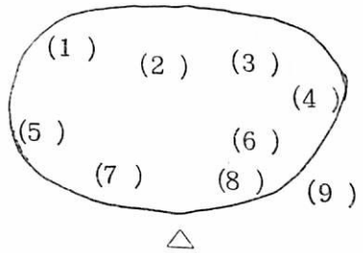
(あ)



(1) 線香立てに線香　(2) 茶　(3) 金　(4) セェー　(5) コップに水，中にキンチョウケの葉　(6) ミキ　(7) ウム煮物。

※四角膳を使わない。訳不明。丸盆使用.

(い)



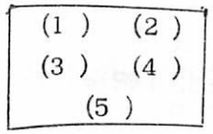
(1) ミキ　(2) ミカン　(3) コップに水，竹の葉入　(4) ローソク　(5) 線香立てに線香　(6) ウム7個　(7) 茶　(8) セェー　(9) 菓子2個。

アラスィチの祭日

朝，野菜煮物，汁，つけもの，飯で四つ組ゼンを作り，表戸へ向けて供える。飯には，桑木で作ったハシを十字状に立てる。火の神祭りというけれども，特別，何もない。

シバサシ・・／週後のミズノエの日である。シカリの供え物など同じ。水の神の祭りという。シバをさしたという伝承はない。

ゼン組の例.



(1) ミキ　(2) 線香立てに線香　(3) コップに水　(4) ロウソク　(5) 桑木のハシ6本　(6) サラにミカン3個。

(6)

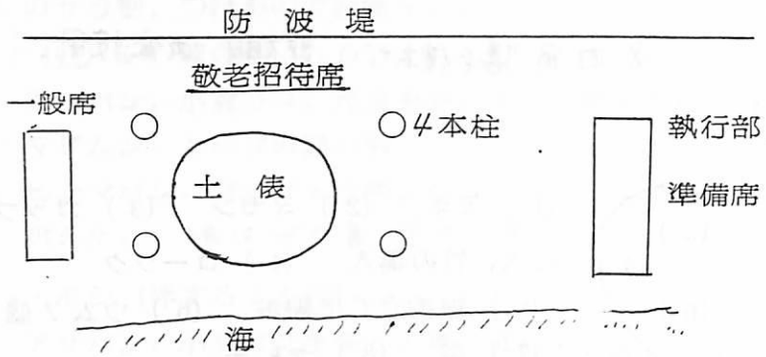
アラセツのシカリには，丸盆を使うのが特徴だ。

「シチとシバサシやナンカ（7日）ヒダメリュリ（間がある）」といい，かっては7日7夜，八月踊りをしたそうである。／977（S52）年現在は，スィチの夜は，女性が八月踊りを広場でしたが，シバサシには，数人が，区長宅に集り，八月踊り唄の歌遊びを太鼓をたたいてした。男性が2人，見え「八月踊りをしなければいけない」と述べていたが，歌詞など存じている様子はなかった。存じている方で，八月踊唄で「若松様」「海のささ草」「諸鈍長浜」「赤木名観音堂」「あいはと」等々だった。

ジュウゴヤ（十五夜祭）

シマ共同体としては，最大の行事である。1977年は，ジュウゴヤが2回行なわれた。

(あ) 名瀬在住和瀬郷友会主催十五夜祭　日時・9月18日（日）旧8月6日3回目という。



土俵は，カマスに砂を入れ，周りに置いた。

プログラム

執行委員長あいさつ　　和瀬区長あいさつ　　会計報告（別紙）

監査報告　　子供すもう（東西）　　個人戦　5人抜き　3人抜き

青年団すもう。

途中，寄付金者と寄付金の発表。最低千円，最高一万円。20余万円集まり十万円は，シマへ寄付。現金の他にミキ5升，セェー2升。

敬老席に20人前後出席していた。70才以上が30人位いるという。夜，浜で八月踊り。踊る人は多いけれども，歌える人が少なかった。ハヤシのところだけ男の大声が響いた。踊られたのは，「ねうどり」「若松様」「諸鈍長浜」「海のささ草」「赤木名観音堂」「あいはと」「でまちじょ」「俊金」だった。貸し切りバスで，名残り惜しそうに帰っていって終了だった。

(い) 和瀬部落主催十五夜祭り

新9月27日が旧十五夜だった。9月23日夜，常会がもたれた。十五夜祭についてだ。

場所・田中義吉区長宅。　議題・準備するものについて。　土俵は，郷友会の築いたのではいけない後日準備する。

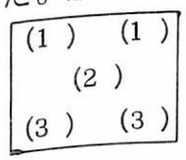
買う物・ミキ1斗。セェ5升。ビール，カマス，鉛筆，ノート，餅米10Kg。敬老会もかねる。招待する人，70才以上13人。記念品，何かあげる。以上だった。当日，土俵から子供，大人が出発して，太鼓をたたき（昔は，ホラ貝も鳴らし）「スモウ　スモウ」と，シマ中を練り歩く。旗，軍配，太鼓，力士の順，悪なものを払うという意味だ。シキ病（疫病）が多かった。子供達のすもうが中心。徒手体操をしたりした。招待者には，タオル1枚，鶏のモモ肉，白餅2個の折詰。夜，広場で女性の八月踊りがあり，男性は1人だけ観覧していた。運営費は，郷友会からの十万円と当日の寄付でまかなわれた。1976年は，各戸千五百円ずつ負担金を集めた。稲作をしていたころは，1～1.5合の飯用と，餅米2合集めた。寄付金は，1万円1名，5千円1名，3千円2名，2千円13名，千円11名，合計5万8千円だった。（公告より）支出は，買い物（名瀬で）29,960円，和瀬で15,450円，アラセツ用9千円，和瀬分校へ2千円。他に外燈代などに払うようだ。

(あ) すもうが始まる前に土表中央で泉　牧貞氏が，村内の安全と繁栄を祈願する。

(い) 祭りが終わった後，4本柱の上に飾ってあった椎の木の枝をもらい，先祖棚や神棚などにあげる。4本柱を倒す.

ル）9月

クグァ　ックンチ（9月9日）にジロ（いろり）や先祖棚に願直し願立てをした。願直し（ガンノォ　ーシ）.



(1) オマルムン（円いダンゴ）　(2) セェー

(3) 線香立てに線香　別に野菜煮物。願直しを終わると，シューギ（シトギ）だけを供え，線香を立てて，願立てをする。

△

ヲ）10月

カネサル（カノエサル）・墓参，墓そうじ。男性は，シューキを持ち，浜へ出て遊んだ。カネサルムチを作った。ニセ（青年）メラベ（女童，子青年）など，シマばかりでなく，安脚場までも行って，ムチムレをした。

ワ）11月

行事なし村の招魂祭がある。

カ）12月

正月迎え準備の月である。今日は，家畜が少ないので準備といってもそれほどまででない。かっての事なども含みながら述べたい。

大そうじ・日は決まっていない。20日過ぎ家の都合でする。

畳の敷がえ・29日にした。簡単な祝，セェのとりかわしをする。畳作り，今日は，購入（城の畳屋，名瀬から）かっては，旧8月ごろ，トウガヤの茎を